

〈写生文と小説〉の狭間で

— 虚子「俳諧師」「続俳諧師」を中心に —

山下航正

はじめに

高浜虚子の「俳諧師」及び「続俳諧師」は、各々、初出から、単行本、文学全集に掲載される時、改稿・改訂がなされている¹⁾。これらの改訂については、その研究のほとんどで触れられてきたが、その改訂の内実が詳細に示されることはなかった。そのため、橋本寛之氏の「決定版とみなしてよい民友社版」といった表現²⁾や、坪内稔典氏の『「俳諧師」のテキスト』としては、初出のその散漫な部分を整理した九十回本が最良³⁾といった見解など、その判断基準が曖昧であるために、説得力を欠くことになっている。

また、「俳諧師」「続俳諧師」研究の多くは、作品の自伝的内容によって、事実との照応やモデルの考察といった、作家論的な手法によって進められてきた。例えば、相馬庸郎氏は、『「俳諧師」に登場する人物たちや事件が、(中略)かなり自在に虚構されている点も多いのに気づく』と論じながらも、最終的には「その虚構された世界を支える主体的な真実が、虚子自身の具体的な青春の性格にかかわっていた⁴⁾」としている。また、近年の論考でも、大西貢氏のように、「小説家」となり得なかった《無念さ》の如きものは、虚子が、虚子

自身で、深く、苦く、噛み締めていたのではないか⁵⁾」、あるいは、「実際に下宿屋を経営し、虚子の妻のいとが手伝ったりしたものの、政夫は失敗し、病気で死んだ。その事が、文太郎の死として『続俳諧師』の中では、印象的に描写される。」という具合である。これらの研究が明らかにしてきたものも大きいですが、作家論の枠から抜け出せていないという問題も存する。

こういったことを踏まえ、本稿では、「俳諧師」「続俳諧師」の初出と、それぞれにおける一回目と二回目の改訂の差異を示しつつ、作品の二度の改訂の内実、そこからうかがえる作家の意図を探っていく。そして、当時の虚子による評論とも照らし合わせ、この間、虚子が何を見、何を考えていたかを明らかにしたい。

I 改訂の様相とその意味

まず、具体的な作品の改訂を見る。次の表1と表2は「俳諧師」、表3と表4は「続俳諧師」の改訂状況を表したものである。それぞれの表中、上段が改訂前、下段が改訂後にあたり、改訂内容の差を欄内に記号で表している。

表1 「俳諧師」「続俳諧師」の改訂
「初出」から「民友社版」へ

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
渥美への師事	北湖との会食	北湖東京へ	十風と佐野	(同右)	(同右)	しづ豊紙作り	十風夫妻滞京	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	嵐山散策	下宿での談話	十風の来京	小説の試作	(同右)	夕暮れの散歩	(同右)	(同右)	(同右)	寂光院訪問	掏摸の俳友	(同右)	高校での思索	友人との散歩	友人を見送る	祝賀会	略歴と家族	新生活への夢	成瀬の下落	三蔵、学校へ			
◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	完		◎	◎	◎					△	×	×	×
68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
寄席通い	(同右)	十風北海道へ	小光への興味	夫婦の会話	北湖との会食	(女郎の話)	(雪駄の話)	十風宅へ下宿	(同右)	十風宅訪問	(同右)	蓬亭宅訪問	(同右)	上京の道中	渥美との面会	三蔵の退学	(同右)	退学への思索	水月の帰京	艶書への対処	鶴子の思索	水月の艶書	(同右)	下宿での水月	鶴子と水月	水月滞京へ	(同右)	鶴子の髪結い	水月との散歩	水月来京	鶴子の思索	鶴子縁談放棄	鶴子洗い張り	
完	完	完	◎	完	完	◎	完	◎	完	◎	完	◎	完	完	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
99	98			97	96	95	94	93	92		91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	
十風の没落	渥美宅訪問	三蔵京都へ	十風音信不通	水月の死	(同右)	(度々の訪問)	(同右)	三蔵の再訪	兄妹喧嘩	小光兄来訪	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	三蔵小光宅へ	(同右)	(同右)	小光銭湯へ	(瘦の出産話)	自宅での小光	北湖の来訪	(食後寄席へ)	(小光退出)	(小光と会食)	(同右)	三蔵料理屋へ	(寄席通い)	(同右)	(雑誌購入)	(菜屋の様子)	(擦れ違い)	(同右)		
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	◎	◎	◎	◎	◎	△	△	△	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
104	103	102	101	100																														
小説への希望	十風の死	病床の十風	三蔵の見舞い	創立の失敗	会社創立へ																													
◎	◎	◎	◎	◎	◎																													

完||完全に一致 ◎||ほぼ同じ ○||概ね同じ △||大幅な改稿 ×||削除

〈写生文と小説〉の狭間で

表2 「民友社版」から「春陽堂版」へ

完 完 完全に一致 ◎ (完) 〓 わずかな改稿
 ◎ 〓 ほぼ同じ ○ 〓 概ね同じ △ 〓 大幅な改稿 × 〓 削除

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
下宿での水月	水月滞京へ	(同右)	鶴子の髪結い	水月との散歩	水月来京	鶴子洗い張り	鶴子縁談放棄	渥美への師事	北湖との会食	十風東京へ	十風と佐野	(同右)	(同右)	(同右)	しづ畳紙作り	十風夫妻滞京	(同右)	(同右)	(同右)	嵐山散策	下宿での談話	十風の来京	下宿での散歩	小説の試作	(同右)	夕暮れの散歩	(同右)	(同右)	寂光院訪問	掏摸の俳友	高校での思案	友人との散歩	下宿決め	友人を見送る	略歴と家族	
◎ (完)	完	完	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)

74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	
北湖の来訪	(食後寄席へ)	(小光退出)	(小光と会食)	(同右)	(同右)	三蔵料理屋へ	(寄席通い)	(同右)	(雑誌購入)	(楽屋の様子)	(擦れ違い)	(同右)	寄席通い	(同右)	十風北海道へ	小光への興味	夫婦の会話	北湖との会食	(女郎の話)	(雪駄の話)	十風宅へ下宿	(同右)	十風宅訪問	蓬亭宅訪問	(同右)	上京の道中	渥美との面会	三蔵の退学	(同右)	退学への思案	三蔵への注意	三蔵への思案	水月への対処	水月の艶書	下宿での水月		
◎ (完)	◎ (完)	△	〓	〓	〓	〓	〓	〓	×	×	〓	〓	〓	〓	〓	〓	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	〓	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	
小説への希望	水月の死	渥美宅訪問	三蔵京都へ	十風の死	病床の十風	三蔵の見舞い	会社創立失敗	その後の十風	十風京都へ	(度々の訪問)	(度々の訪問)	(同右)	三蔵の訪問	(同右)	三蔵小光宅へ	小光銭湯へ
	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)	◎ (完)

表3 「初出」から「民友社版」へ

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
紅漆宅へ帰宅 (仙果の批評)	(其中の帰宅)	盛春館訪問 (同右)	(同右)	照との会話 (同右)	(禿山の忠告)	照との会話 (同右)	(禿山の忠告)	(訪問の理由)	禿山の訪問	照回復の兆し (同右)	照の発病 (同右)	紅漆からの文	禿山の忠告	其中盛春館へ	三蔵紅漆宅へ	(紅漆の依頼)	(紅漆と其中)	(紅漆の過去)	紅漆からの文	梅雨の忠告 (紅漆の帰宅)	(照との会話)	度々の訪問	春宵の思案	紅漆の転居	春宵の思案	紅漆との会話	紀行文の執筆 (公園の散歩)	兩人帰途へ	(盛春館訪問)	文太郎の忠告	俳句と衣食	紅漆宅訪問	境内での会話	向島での散歩		
11		10	9	8	7	6	5	5	4	3	2	1																								
○	×	○		完	◎	◎	◎	△	△	◎	◎	◎	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	
春宵の思案	ちびの発病 (同右)	俳友の来訪 (同右)	現実の恐さ (同右)	読者からの書 (同右)	俳諧趣味論 (同右)	気の落ち着き (同右)	ちびの加勢	春宵の奮闘	文太郎の帰郷	女将の助言	運営上の苦勞	初日の様子 (同右)	下宿運営準備 (同右)	紅漆の拘引	(文太郎の書)	照との会話	其中の失敗談 (文太郎の書)	内祝言	春宵の思案 (紅漆の手紙)	(お霜へ報告)	報告の不安	紅漆の妊娠	禿山の忠告	(兄弟の会食)	(盛春館訪問)	(挨拶回り)	文太郎の上京	俳句と衣食	禿山と仙果	句会の様相						
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12		
◎	◎	○	◎	◎	◎	完	完	完	◎	完	完	完	◎	◎	◎	◎	◎	○	△	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72
発行の目前 (同右)	俳友の心裏 (同右)	文太郎の奮闘 (同右)	発行準備 (同右)	雑誌発行へ (同右)	雑誌発行へ (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵夫婦転居 (同右)	月末の会計	貸家探し	禿山との会話 (同右)	家族の心境 (同右)	春宵の思案 (同右)	文太郎の思案 (同右)	(夢の出来事)	(静養の勧告)	春宵の発病	現実への意欲	俳諧趣味批判	手紙の返送	句会参加	春宵の落胆	盛春館訪問	文太郎の思案 (同右)	月末の会計	文太郎の思案 (同右)	月々の会食	紅漆への手紙	営業の安定	慣れぬ妻子 (同右)	紅漆への手紙 (同右)	文太郎の帰京 (同右)	営業への支障 (同右)				
74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40		
△	×	◎	○	◎	◎	×	×	◎	◎	△	○	◎	◎	○	△	◎	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109					
文太郎の死 (同右)	(同右)	(同右)	病状の深刻化 (同右)	病室の文太郎 (同右)	其中への思案 (同右)	文太郎の不安 (同右)	明るい春宵宅 (同右)	病室の文太郎 (同右)	明るい春宵宅 (同右)	病室の文太郎 (同右)	文太郎の入院 (同右)	(入院費工面)	春宵宅の会話 (同右)	文太郎入院へ (同右)	文太郎の相談 (同右)	文太郎の発病 (同右)	春宵の遠巡 (同右)	「俳諧ホケ登」	順調な「俳諧」	明るい春宵宅 (同右)	春宵の思案 (同右)	「俳諧」発行 (同右)	(春宵の思案)	春宵の思案 (同右)	明るい春宵宅 (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵の思案 (同右)	春宵の思案 (同右)			
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75											
○	◎	◎	◎	完	完	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

完 完全に一致 ◎ ほぼ同じ ○ 概ね同じ △ 大幅な改稿 × 削除

表4 「民友社版」から「改造社版」へ

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
ちびの加勢	文太郎の帰郷	女将の助言	運営上の苦勞	初日の様子 (同右)	下宿運営準備	紅漆の拘引	照との会話 (文太郎の書)	其中の失敗談	(文太郎の書)	内祝言	春宵の思案 (紅漆の手紙)	春宵の思案 (お霜(報告))	報告の不安	照の妊娠	禿山の忠告	禿山の忠告 (兄弟の会食)	(盛春館訪問)	(挨拶回り)	文太郎の上京	俳句と衣食	禿山と仙果	句会の様相	紅漆宅へ帰宅	盛春館訪問	(同右)	(同右)	照との会話 (禿山の忠告)	禿山の外出	照回復の兆し	(同右)	照の発病	紅漆からの文				
17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	7	6	6	5	4	3	2	1																		
◎(完)	◎(完)	完	◎(完)	◎(完)	◎	完	◎	○	◎	△	△	×	○	△	△	×	△	△	△	◎	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
(同右)	文太郎の奮闘	発行準備	雑誌発行へ	俳諧師とは	春宵夫婦転居	月末の会計	貸家探し	禿山との会話	家族の心境	(同右)	春宵の思案	文太郎の思案	(静養の勧告)	春宵の発病	現実への意欲	俳諧趣味批判	句会参加	春宵の落胆	盛春館訪問	文太郎の思案	月末の会計	紅漆への手紙	営業の安定	慣れぬ妻子 (同右)	文太郎の帰京	春宵の思案	ちびの発病	(同右)	俳友の来訪	現実の恐さ (同右)	読者からの書	(同右)	俳諧趣味論	気の落ち着き		
42	41	40	39	38	37	36	36	35	34	34	33	32	31	30	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18									18
◎(完)	◎(完)	○	×	△	○	△	△	◎	△	△	◎(完)	◎	○	○	×	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎(完)	◎	◎	◎	○	○	△	△	×	×	×	×	×	△	
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74										
文太郎の死	(同右)	(同右)	(同右)	(同右)	病状の深刻化	(同右)	文太郎の不安	病室の文太郎	明るい春宵宅	病室の文太郎	病室の文太郎	(同右)	文太郎の入院	文太郎の入院 (入院費上面)	春宵宅の会話	文太郎入院へ (転業の相談)	文太郎の発病	(同右)	春宵の逡巡	「俳諧ホケ経」	順調な「俳諧」	明るい春宵宅	春宵の思案	「俳諧」発行	発行の目前											
63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	44	44	44	43	43												
○	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	◎(完)	△	△	×	△	◎	○	△												

完 〓 完全に一致

◎ (完) 〓 わずかな改稿

◎ 〓 ほぼ同じ

○ 〓 概ね同じ

△ 〓 大幅な改稿

× 〓 削除

I—1 「俳諧師」

以下、それらの内質を追う。

I—1—1 a 「初出」から「民友社版」へ

まずは、「俳諧師」の「初出」から「民友社版」への改訂について追う。最初に注目されるのは、主人公三蔵の尋常中学校の卒業に關して、学校まで来て成績を確認する三回分が消されていることである。また、三蔵が学年三位に落ちるといふことは二回に残っているが、「しかも学校生活に於ける此一步の敗北はやがて堀和の社会的の敗北を意味する。」という、伏線めいた校長の発言は削除されている。ここからは、新聞連載ということに対する配慮の消去と、成績への執着心を後景化させることで三蔵の「俳諧的生活」への話題の移行をスムーズにする意図とがうかがえる。

次に、三蔵がドイツ語を習っていた渥美家の長女、鶴子についての描写が改められている。

女学雑誌にも飽いて其上に両手を重ねて、肩を落して考へ込んだ鶴子さんの顔は引き締まる。鶴子さんは燈火の影に一人の男の顔を描く。

(中略)

其顔が消えると、同じく高等中学の帽子を被つてゐる三蔵の顔が浮ぶ。此顔も目が大きく鼻も低く無いが口が小さく顎がすら／＼と細つてゐて男らしく無い。殊に言葉つきが投げ出したやうで力が無い。斯ういふのは鶴子は嫌ひだと思ふ。其からまだ見た事は無いが、眼鏡を掛けた哲学者らしい眼付きの、口許のぐつとしまつた意味の深い顔が想像される。これは今日父の話しに近々行くといつて来た篠田水月の顔である。水月

の性は時々父母から聞かされる、其話しから組み立てた顔が斯んな顔である。鶴子は此顔も好きだと思つた。けれども彼の顎の稍角ばつた口の大きい実行家らしい顔の方を尚好ましいと思つた。(三三六)

異性としての水月や三蔵に思いをはせる鶴子の思索が具体的に細かく描かれているが、この箇所は、三十四回に書かれていた干した洗濯物に三蔵との夫婦生活を想像する鶴子と下女のお常、四十二回のお常を仲立ちとする水月とのやりとりなどと同様に、削除されていく。これらはひとまず、鶴子の内面描写の軽減により、三蔵を物語の主人公として焦点化する意図ととることが出来る。しかし、四十五回から四十六回にある、水月から鶴子への艶書に關して、「初出」では鶴子の手元に一晚置かれ、彼女が思案する場面が描かれたのに対し、「民友社版」ではその日の夕方には両親に渡されている。これらのことから、もともと作者には、三蔵に限らず、彼に關わる人物も詳しく描写しようという意図があつたが、主人公三蔵に焦点をあてることで周囲の人物を後景化していく、換言すれば、三人称小説としての語り手の視点が制限されていったということが言えそうである。

このことについて、高橋春雄氏は早くに、「俳諧師」において、「作者は自在に他の人物の内側にも入りこんでゆく」「多元的な手法」とつていると、三人称小説、あるいは語りを意識した見解を述べている。⁽²⁾しかし高橋氏は、「もともと三蔵は虚子自身の分身であり、李堂・北湖・水月・十風はそれぞれ子規・内藤鳴雪・藤野古白・新海非風をモデルにしたもの」と、モデル考の枠内にとどまっている。

そして、「初出」のものを考察対象にしているために、「民友社版」においては「多元的な手法」が弱くなっていることに触れていない。氏が指摘する「多元的な手法」は、改訂によって削減されているのである。

続いて、三蔵が熱を上げる女義太夫語り、小光に関する描写について。これはこれまで、入浴の場面が多く論じられてきたが、他にも看過できない部分がある。次のような小光と母親のやりとりである。

稽古が済んで光花は使ひに出る。母親は台所で鮫鱈鍋を拵へて居る。小光は猫板の上に頬杖を突いて大きな欠びを一つして、「お母さん。」と暖れた声を出す。「何だえ。」と母親の返辞は優しい。「昨日兄さんが来て全体何といったの。」「別に何といふ事は無いが、お前さへ納得なら嫂さんのお産の間は私に来て貰ひ度いといふのサ。」小光の顔は曇る。「井上のお母さんはどうしたのサ。自分の娘の産に来ないついでいふの。」「さういふわけでも無いだらうがね。井上はあの通りの世話しいうちだし……」「それでは我家は世話しくは無いの。人を馬鹿にしてゐらあ。」と戸棚から茶碗を出して猫板の上に置く。

(八十三)

この他にも、三蔵が同席しているにもかかわらず実兄と兄弟喧嘩をして涙を流す九十一回や九十二回など、具体的な小光像に迫ることのできる、いわば生身の小光が描出されている。しかしこれらは、入浴の場面と同時に縮小又は削除されている。この小光に関して、はじめ漱石は賞賛し、「小光はもつとさかんに御書きになつて可然候決して御遠慮被成間敷候今消えては大勢上不都合に候」というアドバイスをした。だが、三日後の書簡では、「又余計な事を申上て済み

ませんが小光入湯の所は少々綿密過ぎてくたくた敷はありませんか。(中略)どうか小光と三蔵と双方に関係ある事で段々発展する様に書いて頂きたい」という苦言を送っている。そのことを受けて、虚子は「民友社版」で三回分だった入浴場面を一回分に縮めたようである。これらの削除を行うことで、先の鶴子改訂と同様に、主人公三蔵への焦点化、三人称小説としての語りの制限が行われているようである。

そして、水月の死に関する改訂がある。「初出」で、九十七回に描かれていた水月の死が、「民友社版」では最後の九十回に移されている。これにも多くの指摘がある。橋本寛之氏は、十風と水月の死が同じ明治二十八年に設定されていることに着目し、「後継者問題を拒否して以後の子規的精神、文学とは異なる虚子自身の自立の世界を、道灌山事件以前に見出そうとした虚子の隠された意図の結果がある」としている。また、一條孝夫氏も、十風と水月の二人を合わせて考え、「彼らのモデルとなった新海非風、藤野古白の実際の没年月とのズレ」、「最後になって何の前ぶれもなしに彼の自殺が告げられ幕切れを迎える、という段取り」から、「単なる思いつきではない、虚子にとつてなみなみならぬ比重を持ったモチーフであり、「三蔵(虚子)にとつて水月(古白)は何者であったのか、ここで二人の関係が改めて問われなければならない」と論じている。一條氏の「三蔵(虚子)にとつて水月(古白)は何者であったのか」といった表現が端的に表しているように、この問題は、冒頭で触れた、モデル考の枠内に終始しているところがある。

そこで、この問題をモデルと切り離して考えたい。「初出」では、

九十六回まで三蔵の放蕩生活が、そして九十七回でそれから二年後の俳友たちの状況、すなわち蓬亭と李堂の従軍と水月の死が語られ、以降結末にかけて、俳友の一人である十風の死と、現在の三蔵の小説への意欲が描かれている。対して「民友社版」では、八十四回までで三蔵の放蕩生活が、そして八十九回までにかけて、その後二年間の十風夫妻の生活と十風の死が、蓬亭と李堂の従軍も含めて示され、京都滞在中の三蔵によって、学生生活、渥美家のことが思い出され、その延長上で、水月の死と、現在の三蔵の小説への意識が掲げられている。つまり、「初出」「民友社版」とともに、放蕩生活を終えた三蔵と、当時の友人たちのその後を物語の最後に配置するという大きな枠組みをもっている。そのことでは二つは変わりがない。従来の研究は、モデルにとられるあまり、このような捉え方を見失っていたとも考えられる。

I-1-1-b 「民友社版」から「春陽堂版」へ

続いて、「民友社版」から「春陽堂版」への改訂を考える。大略は「民友社版」を引き継いでいるが、大きく四つの部分で差異が見られる。

まず、六十四回から六十六回にかけての削除である。「楽屋での下卑たことを言つた噺れた声は決して小光ではあるまい。あの品格ある芸を持つてゐる小光がどうしてそんな下卑た事をいほう。たしかに小光では無いと断定する」と、楽屋から聞こえてくる猥談の声を主を小光ではないと言ひ聞かせたり（六十四回）、小光に関する雑

誌を「ありつたけを買占めて急ぎ足で下宿に帰」り、「さうして其夜は寄席を休んで呼吸をはずませて読む」（六十五回）三蔵の姿が削られているが、この箇所の有無によって、三蔵の小光への熱中やその度合いが変わるということはない。物語それ自体への影響はない改訂だと言えよう。

続いて、小光の入浴の描写の削除であるが、前記のように「民友社」版で縮小されたそれは、「春陽堂版」では完全に削除されている。漱石は、『俳諧師』に就¹³てにおいて、「繁簡のムラは例の浴場の描写などが然うだ。一冊にする時著者が書き改めたかは知らないが新聞に出たまゝだとすると僕は余り感心しない」と記している。この意見は、先に見た虚子宛書簡と合わせて、少なからず虚子に影響を与えたものと推測できる。ただ、この改訂も、主人公三蔵への焦点化に関わっていると見えそうである。

第三に、七十六回から八十三回にかけての、三蔵の小光宅訪問にかかわる大幅な削除である。

其から又四五日隔きに二三度訪問した。留守の時もあつた、うちに居た時もあつた。家に居た時は上り込んで話しをしたが別に何といふ事もなかつた。嘗て腹の中にごろくしてゐた一つの塊は草津で逢つた時すつかり溶けてしまつたのであるが、其から後ち又別の小さい塊が出来て来て其が自然々と大きくなつて来るやうに覚える。たゞ行つて話しをするだけでは其塊が承知し難い。承知し無いどころか其度々に大きくなる。是非新発展を試みねばならぬ。

(八十二)

他に、小光の家で三蔵が鳥鍋を二人で食べようとする場面なども

削除されている。小光の描写の削除が以前にも増して進み、三蔵と小光とが直接関わりを持つのは料理屋での会食の場面だけになる。小光へのウエイトが減る分、三蔵への焦点化が進み、小光は、三蔵の一周辺人物になっているのである。

最後は、物語の結末部、三蔵の小説志望の箇所の削除である。

三蔵は尚ほ小説に意を絶つことが出来ぬ。当時売出しの硯友社の作物などをみると物足らぬ所が多く何所にか新たならしい境地があるやうな心持がする。が扱て筆を取って見ると相変らず何も書けぬ。已むを得ず時機の到るを待つこととして、暫く俳句専攻者として立つことにする。小説俳諧師は之れを以て一段落とする。(九十)

物語全体を統括し、「小説俳諧師は之れを以て一段落とする。」と結ぶ語り手は、「春陽堂版」には存在しない。北湖との会食の場面でも俳諧と小説の間で揺れる三蔵が描かれていたが、俳諧に傾く三蔵の内言が目立つように修正されている。これにより、物語は〈俳諧師〉三蔵の過去としてまとめられ、タイトルとの整合化がはかられているのである。

以上の、「俳諧師」の改訂のポイントをまとめると、次のようになる。まず、「初出」から「民友社版」へについては、主人公三蔵への焦点化がはかれており、そのため彼の周辺の人物描写が削除されている。それは、鶴子や小光といった、当初は内面にも迫る描写がされていた人物の可能性を奪うことになっている。そして、「民友社版」から「春陽堂版」へは、三蔵への焦点化がより進められており、それによって小光の描写も大幅に削られている。笹瀬王子氏は初出

の「俳諧師」に関して、「出来上がった作品が図らずもそうなってしまう」というよりは虚子が執筆の際に用いた方法、つまり「作中における他者との関係からそれを自然に浮かび上がらそうとする方法を採用した」ために、「三蔵の造形に関して〈中心をいつまでも遠方に置〉くようになったことは「避けようがなかった」といった方が適切である」という、当時の作家の意図を探った、興味深い見解を示している。その失敗を虚子が二度の改訂によって挽回しようとしたと考えられるのだが、〈写生文から小説へ〉という虚子の改訂意図の内実が、鶴子や小光を通じてみえてこよう。

I-2 「続俳諧師」

以上のような「俳諧師」改訂に対して、「続俳諧師」はどうであるうか。

I-2-a 「初出」から「民友社版」へ

まずは「初出」から「民友社版」への改訂であるが、最初に取り上げるのは、俳友に関する描写の削除である。

梅雨が雑誌は殆ど春宵自身のものとして出される事になったと聞いて、

「僕は相談に預る権利も無いのかな。」

と厭味を言った時亮山は斯う言った。

「君からそんな不平を聞かうとは意外であった。以前雑誌の話があった時分、金銭上の問題が五月蠅といふので君は「も二もなく辞退したのでは無かったか。君許りでは無い僕等が断行し兼ねたのも其為めであった。春宵は下宿屋で商売の味を覚えた為めか、此で金儲けを遣らふとい

ふのだから遣らしたらい、ちや無いか(後略)。」

(中略) 禿山に対して陳べた厭味は其点よりでは無く、唯彼等仲間
の機関雑誌たるべきものが春宵一人の手に帰する観あるを快からず思つて
ゝあつた。其事に関しては禿山自身でも多少考慮を費して居た。

「経済は春宵一人で引受けたところで、編輯其他は相当に我等の方で
制肘する必要があるさ。」斯う言つて禿山は笑つた。此言葉には梅雨も
心ゆくやうに笑つた。(百七)

春宵による雑誌発行に関する友人達の思惑が描かれた場面だが、
他に、一回から四回にかけての春宵と梅雨の散歩、二十七回におけ
る禿山の来訪に関わる話題なども、削除されている。「俳諧師」同様
に、主人公の周囲の人物達の描写が制限されることで、主人公の春
宵が焦点化されている。

続いて、春宵と紅漆との交遊に関する削除である。紅漆が物語に
直接登場するのは一回から二十一回にかけてであるが、表3から確
認できるように、そのすべてが削除されている。そのことで、紅漆
の直接的な描写は消えてしまつている。これも、主人公春宵への焦
点化のための一助と言える。ただ、春宵が紅漆の家に留守番として
同居するいきさつは「民友社版」でも冒頭に示されているが、初出
に存した、春宵が以前から紅漆に興味を持っていたということとは、
分からなくなる。さらに、結末には、文太郎の死後、入獄体験を経
た紅漆の現在に思いをはせる春宵が描かれていて、その結果読者は、
紅漆の人物像について情報不足になる。これらのことへの作者の意
識は、無かつたようである。

次に、野村其中と言う人物にかかわる削除である。彼は、紅漆と

同様に、春宵や梅雨、禿山らのグループに、紅漆と同様に後から加
わつた人物だが、先ほど触れた俳友たちとは、必ずしも同列に扱え
ないところがある。

「新たらしい俳人」の中でも最も目立つた(七)とされる其中は、
紅漆とも関係があり、紅漆とその親戚の女性との間を取り持つたか
と思えば、紅漆の親族に彼を中傷するようなことをしたり、相手の
女にも迫る、という「不思議な男」(十九)である。春宵が紅漆宅へ
同居のために下宿を出ると、その直後に彼の居た部屋に引越して
来(二十一)、場に応じて出鱈目な発言や体裁を取り繕う言動をする(二
十、二十一)。それらの箇所が削除されている。当初、様々な場面で
登場し、春宵にも関わりを持ちつつあつた其中が、その後は、下宿
料の滞りのために逐電したこと(百四)、その後就職した新聞社もす
でに辞めたこと(百三十一)、そして最後に「損をする人」の一例と
して登場する(百四十)程度になる。この其中の削除についても、
春宵への焦点化のためとひとまずは言えるだろうが、この表現では
言い足りない。前半の描かれ方や、結末部での、兄の死後に脳裏に
浮かぶ「損をする人」のうちの一人という役割からみれば、「初出」
当時はもつと物語に関わる可能性を秘めていたと考えられないだろ
うか。「俳諧師」における鶴子や小光と同じような人物として、其中
を位置づけていいように思われる。

続いて、下宿業からの解放にかかわる削除である。

こゝ迄考へて来て春宵は物に襲はれたやうに驚いた。

「果たしてさうだとすると自分は唯だ一時の懊悩を紛らす為めに兄の

仕事を利用し、妊婦を苦しめた事になる。独り他人許りで無く、これに拠つて新運命を拓き新生活を見出すと考へた事も必竟一時を糊塗する為めに自ら欺いた事になる。俳諧趣味を呪ひ労働生活を讚美した事も亦た勢ひに制せられた一時の空論たるに過ぎぬ事になる。自分は果たして其程に軽薄なのであらうか。其程操守が無いであらうか。「春宵は自分の股の肉を力を極めて捻つて見て取り留めの無い考へを此の痛さの一点に集中して見ようとした。けれども其も無益であつた。嘗て腹立紛れに照ちやんを足蹴にした其時の百分の一も指尖に用ふることは出来なかつた。自分の今の体はせんまいの緩んだ時計のやうだと春宵は考へた。

(百一)

兄の下宿業から離れたことで、「自分の今の体はせんまいの緩んだ時計のやう」になつたと、開放感を素直に喜べない春宵が、百回から百一回にわたつて描かれていた。それが削除されることで、春宵の開放感は樂觀的なものとなり、文太郎の下宿の暗さとの対比が、より明確になつていく。

最後に、紅漆が書いたと思われている入獄記事、「獄裏の人」の削除に関してがある。

ざつと目を通して行つて見ると場処は判らぬが筆者の境遇は紅漆に似て居た。

『事茲に至つては萬事休すである。若し之が一年となり二年となつた日には当分野外の景色を見る事も出来ぬ。日頃好きな〇〇あたりでもぶらついて来ようと、昼飯を食ひ終るなり直ちに車を郊外に飛ばせた。けれども車上巡査を見る度に予を捕へはせぬかとの心配は絶えなかつた。処が幸ひにもそんな事はなく、三時過ぎ思ふが儘の眺めに飽き俳句など捻つて宿に帰つて来た。』と斯んな文句があつた。仙果が此筆者を俳人と認めたのはこれに拠つてであらうと春宵は推量した。

(百九)

この「獄裏の人」という記事を読んだ春宵は、自分や文太郎、さらには記事の著者や獄中の人々を、「損をする人か得をする人か」という物差しで測つていく(百十一)。しかしこの論理は結末部(百四十一)で再び持ち出され、「民友社版」でも同様に結末部に残されている。だが、「獄裏の人」を読んで善悪と損得との関わりに思考が及んだ時に、春宵の思考が進まず、この論理は立ち消えになる。また、少々先取りするが、「改造社版」では、この「損をする人」「得をする人」という思考に関わる表現自体も削除されていく。つまり、最終的にはこの論理は「統俳諧師」から消えていくわけだが、「民友社版」においては、ひとまずその不完全な部分が削除されたのではないだろうか。

I-2-b 「民友社版」から「改造社版」へ

このような改訂を経た「統俳諧師」は、「改造社版」では次のようになる。

まず、紅漆との関わり的大幅な削除がある。先に指摘したように、「民友社版」では、物語に直接登場しないにも関わらず、春宵が幾度となく想起する紅漆に対して、読者の注意が向き易かつた。しかし、「改造社版」では、物語自体を文太郎の上京から始めている。それ故、春宵と照ちやんと結婚、またそこに至るまでの背景などを示す必要はない。これは、「改造社版」に〈文太郎の死〉という副題が付され、物語そのものをそちらに移行させる処置であつたと思わ

れる。そして、結末部の、帰京間近の紅漆への恋しさは、「民友社版」の、「損得のいずれにも属さない人」ということから、兄を失った空寂の情を理解してくれる相手という意味づけに、スライドされているのである。

続いて、春宵と照ちやんの結婚に関連する内容の削除である。「民友社版」の前半部が大きく削除され、物語は「文太郎の死」を中心に進められている。そのため、結婚したい女性がいるという兄への話（十八）、妊娠の報知をどちらが行うかで生じた二人の衝突（十九、二十）、義母の取り繕うような言葉に対する反感（二十四）などを示す必要がなくなる。二人の結婚が、物語の周辺のものとして扱われていくのである。ここでは春宵にまつわる描写が削られることによつて、文太郎への焦点化がなされている、と言えよう。

このことは、俳諧、あるいは俳友とのかかわりに関する描写の削除にも、密に関わっているようである。次のような箇所である。

今考へてこそ冷汗も出でくすぐつたいやうにも覚えるが当時はそれでも真面目であつた。寸毫の疑もなかつたのであつた。実社会の経験といふものは殆んどなく寧ろ毫も其に煩はされず春宵は唯一図に俳諧趣味論を称へて居た。病人が批評した如く議論と実際との間には非常な隔りがあつたことはいふ迄も無かつた。隔りといふよりも寧ろ截然として全く切り離されたものであつたといふ方が至当かも知れなかつた。そこで此の俳諧趣味論は最初他人を失望させた如く即ち春宵自身をも失望させるものとなつた。此の一年間初めて世間に接し稍現実に触れた彼は唯だ茫然自失する外は無かつた。俳諧趣味論は彼の煩悶苦悩に何の効も無かつた。

(四十二)

物語は、春宵という一俳諧師をもちや軸にはしておらず、春宵と文太郎という兄弟、あるいは兄文太郎についての話が、とつて替わっている。ゆえに、春宵にスポットが当てられる時には有効だった俳友との親交、春宵の俳諧についての思案、具体的には、俳諧と実生活との相克、俳諧趣味論などといったものは不要になる。これも、文太郎への焦点化のためのものであろう。

また、雑誌『俳諧』の発行に関連する事柄の削除も、同様の理由からであろう。

丁度比叡禿山等の仲間で嘗て一度問題になつた事のある俳諧雑誌発行の話が又た頭を擡げて来てゐたが、編輯會計共に一人で引受けて遣るといふ人が無い為めに又た元の如く行き難んでゐた。禿山は其事を話して、「君遣つたらどうか。君が遣る事に極れば誰にも異論のある筈は無し。又た君の所謂衣食の為めの職業として最も適當なものでは無いか。」と言つた。以前此の雑誌問題の持上つた時も、

「君遣りたまへ。君はどうせ俳句で飯を食つてゐるのだから。」など、梅雨は春宵一人を汚れたものゝ如く取扱つた事があつたので春宵は返辞もせず過ぎたのであつたが、此時はもう自信がある、梅雨でも仙果でも何とか言ひ度ければ勝手にいふがよい、と密に其冷評を待設けるやうな心持がして、春宵は斯う答へた。

「うん遣らふ。其代り僕あ其雑誌で飯を食ふやうにするがいか。」

(七十)

これら雑誌発行までの具体的な経緯が、ほとんど削除されている。彼の事業が雑誌の発行であること、そしてその雑誌が俳諧に関わっていること、それらは、兄弟二人の明と暗を描くためには必ずしも必要ではないということであろう。春宵の、梅雨や禿山らに雑誌『俳

「諧」を通しての抗い、という意味も消えることで、兄弟の対比が浮かび上がってくることになる。

最後に、春宵と紅漆の呼称の変更について。「改造社版」において、二人はそれぞれ、「春三郎」「常蔵」というように本名で記されるようになり、それは以後、継続された。この物語から、「俳諧師」という性格が消されていく、その一つの証左である。

以上のことから、「続俳諧師」の改訂全体をまとめると、次のようである。まず、「初出」から「民友社版」にかけて、周辺の人物描写が削除される。そのことで、主人公春宵への焦点化がはかれ、あわせて、その兄文太郎との対比も深まる。しかしこの結果、「俳諧師」の時と同じように、物語で何らかの役割が負わされつつあった人々の描写が削られ、重要な人物となっていく可能性が無くなっている。また、「民友社版」から「改造社版」へは、副題の付与、人物呼称の変更、さらには主人公であった春宵に関わる描写も削除されることによつて、文太郎への焦点化が行われている、などが指摘できよう。しかし、そのことが虚構性や客観性を失わせていったのである。

先行研究でも、このような「続俳諧師」の改訂について検討されてきた。例えば榎本隆司氏は、「続俳諧師」における改訂を「小説」を模索し、小説と俳句の間に揺れた虚子の営為を明白に物語つて」おり、「この改変によつて、小説としての密度は大きく高まった。低趣味を脱して、人間の運命や人物の内面に向かおうとする小説志向が、そこには明確に看取される。」と記されている。また、笹瀬王子氏は、「作者の視点が主人公一人に限定されている点が前作『俳諧師』と大きく異なっている」が、「反対に共通点としては、共に作者

の主張する（主観的描写）の反映がそこに見られる」と論じている。だが、高橋氏が「小説としての密度」という背景には、氏が想定する「小説」があるようだが、それは示されていないし、また、笹瀬氏も、〈主観的描写〉が「小説」とどう絡んでくるのか、明らかにされていない。虚子が小説化であるというその改訂作業が本当に「小説化」と言えるものか検討しないうちは、両氏の見解は客観的な評価とは言えないだろう。

Ⅱ 虚子の写生文観の変遷

これまでの分析で明らかになったように、「俳諧師」「続俳諧師」それぞれ二回の改訂に共通して見られたのは、周囲の人物描写の削減による主人公への焦点化である。そして先行研究は、それをそのまま、虚子の小説化という意図の表れとして、肯定的に受け取っていた。だが、そのような評価は、改訂の実態と照応すべき虚子の意図を、狭い範囲で見えていたようにも思う。そのため、次に、虚子の写生文観を、「俳諧師」「続俳諧師」執筆前後の長い期間を通して追っていくことにする。

同時代の虚子の言説として最初に挙げられるのは、「俳諧一口噺」中の「写生文と小説」である。この評論で虚子は、「唯俳句趣味なる一種の趣味より人間の動作を観察して面白いと思つた事をありのまゝに描く」のが写生文であり、その「写生文は俳句の如き散文として文界に独立すべきもので、小説とは没交渉のものらしい」、と述べている。「ただありのまま見たるままにその事物を模写するを可とす」

という、子規の「叙事文」の影響が看取れる。

続いて、約半年後に出版された「写生文の由来とその意義」である。

ここで虚子は、「もとく、吾々は、小説を書かうという者があつて、写生文は単にその下拵へのつもりでやつて来たのだが、いざ小説の段となると、写生素材だけでは、どうもいけぬ。」と、小説への志向とその模索を明らかにする。そして、「写生文は、元来俳句の上の写生を応用して、主として俳人が試みたもので、「俳句の詠ずる美はもと自然的である」から、小説での「人間の研究は従来の意味でいふ写生以外のものである」、「が然し、今日の写生文は、漸く一転化の機運に向つて、この人間研究に一進路を切り開かうとしてゐる。」と記している。〈写生文から小説へ〉という動きの表れである。さらに「現在吾々写生文家の間に」「二派」があり、その一つは「純客観派」、今一つは「やゝ主観的に傾いた派」であるといひ、写生文であつても「必ず、作者その人の調子が、その描写の上に現はれなければ止まぬ」と結んでいる。

後に虚子は「やゝ主観的に傾いた派」のことを「主観的写生文」と呼び、自己の写生文観の核にしていくなげだが、その「主観的写生文」を胸においた「俳諧師」の執筆についての作者の言が、『俳諧師』に就てである。写生文から小説への移行は「私に取つては余程困難なことであり」、それは「従来やつて来た写生文の途と小説の途とは違つてゐた、だから「自分で草を分けて進まねばならなかつた。」と虚子は記す。〈写生文から小説へ〉の動きの難しさの吐露であり、それが「其等の点からいつても『俳諧師』も尚習作の範圍を脱することは出来ないのだ。」という弁解に至っている。

この弁解は「写生文界の転化」においても、「客観的描写を通じて、底深く潜める深遠なる主観を窺ひ得る事を目的とする」「此の主観的写生文は今將に歩を転じつゝある処なれば如何しても未だ思ふ通りに行かない。」という言葉でも繰り返されている。だが、この評論においてより重要なのは、次の二点である。すなわち、「従来の写生文は事柄に重きを置き近來の小説がゝつた方の写生文は作者の感想の方に重きを置く傾向になつて来た」といふ、「作者の態度」に関わる言説と、「世間の人々の中には往々にして写生文作家は自然派其の他の作品に対抗するものゝ如くに解釈するものがあるが此れは大いなる間違」で「所謂自然派の主張は（中略）我等も面白い事と思つてゐる」が、「只其の作の上に於ける出来栄え（主として客観的描写に於ける技巧）にあきたらぬものが多い。」といふ、自然主義文学への関心を示す見解の存在である。これは、「主観的写生文」を模索していた当時の虚子が、自然主義文学に自身の方向性とながるものを見ていたことの現れである。

ところで、虚子の小説への志向とその難しさについて、藤井淑禎氏の指摘がある。藤井氏は、「被観察物体としての〈事実〉と、観察・表現主体としての書き手という二つの影」が「どこまでもついてまわる」のが写生文であり、「写生文が小説へと跳躍するためには」、「題材としての〈事実〉からの離陸と、ナマの書き手からの自立」が必要である、しかし「写生文の場合、その両者を本来的属性としてことのほか濃厚にもつていたのでから、小説への飛躍は容易なことではない。」とし、自然主義についても、「鑄型的文章表現との決別→写生の徹底→〈事実〉べつたりへの反省→異次元世界の樹立へ、

という写生文の足跡から類推すれば、この時期文壇の主流を占めていた自然主義陣営においても同様の志向が萌していたのではないか、との見取り図を思い描くことも可能である。」と記されている。しかし、藤井氏は、虚子と自然主義とについて、両者の文学的方向性の重なりには触れているが、虚子の自然主義への眼差しについては明言されていない。また、自然主義が〈事実〉を重視するということが後の「私小説」に受け継がれていくことも、意識されていないようである。

さらにこの問題に関して、日比嘉高氏の論考⁽²⁷⁾にも目を向けたい。

日比氏は、明治三十年代から四十年代にかけての「文芸メディアの情報編成の変化と、それにもなる読書慣習の形成」により、作家や批評家に「小説ジャンルの境界変動」が起こり、「作家の周囲を描く類の小説——〈身边小説〉」が増加したことを論じる中で、具体例として、真山青果「妹」、島崎藤村「春」、田山花袋「生」といった自然主義文学とともに、「俳諧師」を挙げている。この指摘に反論はないが、「俳諧師」が〈身边小説〉として読まれることへの虚子の意識については、考察の余地がある。もちろん、日比氏が明らかにしているように、〈身边小説〉とされるための作家の周囲に関する「メタ情報」（「文芸界消息」明治四十一年二月二十三日付『国民新聞』）の存在は否定できない。そして、当時の〈身边小説〉増加の背景にあるのは「小説ジャンルの境界変動であり、「蒲団」にならうといった自己暴露への勇氣ではない」ということに、虚子も漏れない。だが、作家の思惑とは別に、読者が〈身边小説〉として読んでしまうということも、考えられるのではないか。作品の「メタ情報」が作

品の掲載紙（誌）に載るのであればなおさら、それは有効に機能したに違いないからである。

つまり、藤井氏と日比氏の見解を通して導かれるのは、虚子の〈主観的写生文〉は、〈身边小説〉とみなされる要素でもある〈事実〉をベースにしており、また、虚子自身も自然主義文学に近い位置にいたが、そのことに虚子は気づいておらず、また自然主義とは異なる文学を志向していたということである。

本題に戻ろう。先に見たように、虚子は当時、「どういふ態度で描くか」という書き手の問題については自覚する一方、「何を描くか」という、藤井氏の言う〈事実〉に対しては配慮が足りなかった。そして、〈事実〉への認識が明確に現れてくるのが、「俳諧師」「続俳諧師」の執筆から七、八年を経た大正五年、『俳諧師』序⁽²⁸⁾においてであった。ここで虚子は、「俳諧師」「続俳諧師」について、「手近の記憶に残つてゐるものを材料として事実半分、嘘半分で書き上げて見よう、果して写生文が斯かるものを書き得るか否かの試験にさへなればいゝといふ位の無造作の考に立出したものであった。」と言う。写生文から小説へ至るための通過点、あるいは架け橋としての「主観的写生文」の模索を、「俳諧師」と「続俳諧師」において試みた、という見解の表明である。しかし、藤井氏が指摘していたように、〈事実〉からの離陸は難しいものであり、そのことを理解したために、この序文の後半で、「今日から見ると此小説の如きは殆んど問題にする価値もないもの」で、「只前条の理由のもとに私自身の写生文の歴史の上に聊か一時期を画した作品とすべきであるといふに過ぎぬ。」と弁護をしている。

このことを受けて虚子は、「俳諧師」「続俳諧師」ともに二度目の改訂を行った。しかし、「俳諧師」の改訂は、主人公三蔵への焦点化が進み、客観的な三人称の視点が希薄化することとなってしまった。また、「続俳諧師」においても、主人公春宵を後景化して文太郎の物語に改訂しようとしたものの、語り手は、自身の〈事実〉を元に造形した春宵を客観視するまでには至らなかつた。そのために、それ以後も、「此篇に輯めたものは其私の書いた文章のうち、比較的作為のある小説が、つたものを輯めたものであるが、併し、これも世間の人から見れば所謂写生文であらう。其で結構なのである。」²⁹、さらに、「何を小説と言つていかかわからんが俳諧師は」という表現³⁰、つまり、どう受け取られるか分からないが、「俳諧師」や「続俳諧師」は一応小説を企図して書いたものだ、といった見解が出されたのではなからうか。

そして、昭和十四年には、「俳諧師」は「もとくゝ写生文を書いてをつた筆で小説を書いて見ようと思ひ立つたものであるから、そう（「事実半分小説半分」に——引用者注）なるのも当然な事」で、また「続俳諧師」も「主として文太郎といふ一人の生活を書くのが目的であつた。」と、執筆当時の心境を語っており、さらに、昭和十七年時点では、「写生文から発足した小説といふものは、矢張り事実を偽らずに書くといふ方針で何処迄も進むべきものか」と思うが、「小説としての小説といふものとは別問題」であるとした上で、当時唱えていた主観的写生文を、「俳文」という言葉に置き換えるまでに至っているのである。

III 作品と写生文観の推移

以上の分析、考察を集約すると、次のようである。

虚子は当初、子規の言う「ありのまま」から出発していた。しかしやがて、人間研究を志すようになり、漱石が明治四十年一月の「写生文」で述べる、「作者の心的状態」に影響を受けたかのように、「作者その人の調子」を重視し、それを「主観的写生文」という言い方で表し、試みていった。初出の「俳諧師」は、そのような状況下で書かれたものである。ところが虚子は、藤井氏が指摘する、写生文が孕む、〈事実〉と書き手という二つの枷から逃れられなかつた。つまり、「俳諧師」「続俳諧師」は、多くの論者がモデル小説と見ていることから分かるとおおり、事実を元に書いた、あくまでも写生文であつたということに気づいたのである。先行研究では、例えば橋本氏のような、「改訂によって小説としての密度は大きく高まつた」といった評価³¹、「俳諧師」「続俳諧師」を小説と認める見解があつたわけだが、虚子本人は小説と見ておらず、「主観的写生文」と呼んでいた。

そして虚子は、写生文から小説への困難を感じつつ、「俳諧師」の一度目の改訂と、初出の「続俳諧師」を執筆する。そして年内に「続俳諧師」を改訂し、「殆んど問題にする価値もないもの」と言いつつ、また、「俳諧師」「続俳諧師」の二度目の改訂を行うことになる。その、「俳諧師」「続俳諧師」の二度の改訂の本身とは、主人公への焦点化ということ、特に「続俳諧師」の二回目の改訂では主人公自体の入替え、であつた。しかし、それらの主人公が、自身の実人生、〈事

「実」から離れられないことに気づき、虚子は「俳諧師」「続俳諧師」は小説にはなり得ていないと判断した。その自覚が、「俳諧師」「続俳諧師」の位置づけを、「所謂写生文で結構」、「何と言つていいか分からん」もの、「事実半分小説半分になるのも当然」、さらに、俳文という新たな呼称で捉えよう、と言わせたのであろう。虚子は、自らの試みを失敗だと認めていたのである。

虚子と同様に子規の写生文から出発した漱石は、写生文において、作家に必要な「大人が小人を見るの態度」、つまり客観を重視し、それを人称や回想といった語りの問題へとおしすすめ、小説家として認知されていった。写生文から小説を志した虚子が、「俳諧師」「続俳諧師」においては必ずしも納得のいく結果を残せなかつたこと、その虚子が標榜していたのが、漱石とは反対の、しかし小説へ向かうためには欠かせない主観であつたということである。このことの意味は非常に大きいと思われる。

しかし、虚子には小説がないかといえ、そうではない。例えば、「風流儼法」三部作は、同じ登場人物を通して、作者自らが味わつた京都の雰囲気、つまり「風流儼法」(明治四十年四月)にあつた〈事実〉が、「続風流儼法」(明治四十一年五月)、「風流儼法後日譚」(大正八年一月〜同九年六月)にかけて、次第に虚構化されている。これなどは、虚子の〈写生文から小説へ〉が成功したものと見え、当時の虚子には、「俳諧師」「続俳諧師」のように二つの枷に囚われてしまつた系統と、「風流儼法」三部作のように二つの枷から逃れた系統という、二つの系統があつたということも言えるだろう。

おわりに

「俳諧師」「続俳諧師」は、その二度の改訂を通して、虚子の〈写生文から小説へ〉という意図とは反対の方向、すなわち、〈事実〉という写生文の方向に向かつて進んでいる。しかしその過程で、自然主義文学との関わりを見せながら一致することはなく、また、後の私小説につながっていくこともなかつた。ゆえに、「俳諧師」「続俳諧師」の二度の改訂から見えるのは、改訂過程全体を通しての、虚子の〈写生文から小説へ〉という模索の跡には違いないのだが、彼の試み自体は失敗したと言わざるを得ない。しかし、それを安易に否定する前に、虚子の、小説への飽くなき探求心の現れとして、評価できるのではなからうか。

従来の研究は充分に意識せぬまま、虚子の写生文から小説への移行を論じ、また、「俳諧師」「続俳諧師」を、モデル小説、自伝的小説としてきたように思われる。しかし私は、これまで見てきたように、〈モデル小説にならざるを得なかつた必然〉を、忘れてはならないと考える。そしてそのことは、写生文とは何か、あるいは小説とは何か、という問題を、あらためて我々に迫るものでもある。

注(1)「俳諧師」及び「続俳諧師」の単行本収録状況とその章回数を左に示す。網掛けが、初出、一回目の改訂、二回目の改訂である。なお、本稿において、「俳諧師」「続俳諧師」について、初出のものは「初出」、一回目の改訂のものを「民友社版」、二回目の改訂のものを、それぞれ「春陽堂版」、「改造社版」と表記することにす。

年・月	「俳諧師」	「統俳諧師」
明41・2	『国民新聞』(41・7)	
明42・1	民友社版『俳諧師』(90回)	『国民新聞』(42・6) 民友社版『統俳諧師』(140回)
明42・9	新潮社版『代表的名作選集第十九篇 俳諧師』	
大5・5	博愛館版『俳諧師』(90回)	博愛館版『統俳諧師』(100回)
大5・11	春陽堂版『明治大正文学全集 21』(78回)	
昭3・7	改造社版『現代日本文学全集 40』(78回)	改造社版『現代日本文学全集 40』(63回)
昭9・5	改造社版『高浜虚子全集 第四卷』(78回)	
昭12・9	第一書房『俳句文学全集 高浜虚子篇』(部分のみ所収)	第一書房『俳句文学全集 高浜虚子篇』(部分のみ所収)
昭13・5	新潮社版『俳諧師』(78回)	
昭14・6	改造社版『俳諧師』(78回)	改造社版『俳諧師』(63回)
昭24・1	創元社版『定本虚子全集 第九卷』(78回)	
昭25・12	河出書房版『現代日本小説大系 18』(78回)	
昭27・8	岩波書店版『俳諧師』(78回)	岩波書店版『俳諧師』(63回)

昭29・8	角川書店版『昭和文学全集 43』(78回)	
昭30・3	河出書房版『現代日本小説大系 20』(78回)	
昭32・1	筑摩書房版『現代日本文学全集 66』(90回)	筑摩書房版『現代日本文学全集 66』(100回)

- (2) 橋本寛之「高浜虚子『俳諧師』論」(昭和五十九年三月『阪南論集 人文・自然科学編』第19巻第4号)。橋本氏の見解は、引用されている山本健吉「解説」(『定本高浜虚子全集 第五巻』昭和四十九年五月 毎日新聞社)中の、「ここに虚子の最も小説に油の乗っていた時代の芸術意志がはつきり認められるからである」、あるいは「昭和に到ってからの改竄は、(中略)定本として従うに適當とは思わない。」という指摘に依拠したものと思われる。
- (3) 坪内稔典「『俳諧師』(高浜虚子)」(平成元年六月『解釈と鑑賞』)
- (4) 相馬庸郎「『俳諧師』の位相」(昭和四十三年一月『文学』)、『子規・虚子・碧梧桐』——写生文派文学論(昭和六十一年七月 洋々社)所収
- (5) 大西貢「高浜虚子と『俳諧師』の成立——子規と漱石をめぐる青春群像(一)」(平成八年十二月『愛媛国文と教育』第二十九号)
- (6) 大西貢「高浜虚子と『統俳諧師』成立の前提——子規と漱石をめぐる青春群像(三)」(平成九年十二月『愛媛国文と教育』第三十号)
- (7) 高橋春雄「写生文と自然主義——『俳諧師』『統俳諧師』まで」(昭和四十三年九月『解釈と鑑賞』)
- (8) 夏目漱石「明治四十一年七月一日付 高浜虚子宛書簡」
- (9) 夏目漱石「明治四十一年七月四日付 高浜虚子宛書簡」
- (10) 橋本寛之氏(前掲注2参照)もこのことについて言及しており、「三蔵自身とかわかりが薄いと判断した部分を省き、むしろ低徊趣味に堕していると評された場面でも、三蔵の青春のある側面に深くかわりをもつものとしてあえて残すことによって、全体の構成上の整合性をはかった」とし、「多元的な手法」の希薄化を肯定的

- に論じている。
- (11) 前掲注2参照。
- (12) 一條孝夫「『俳諧師』側面」(平成五年十二月『帝塚山学院短期大学研究年報』第41号)
- (13) 夏目漱石「『俳諧師』に就て」(明治四十二年二月五日付『東京毎日新聞』)
- (14) 笹瀬王子「『俳諧師』から『続俳諧師』へ」(平成三年三月『近代文藝新攷』)
- (15) 筑摩書房版『現代日本文学全集 66』(昭和三十二年一月)では、回数・呼称ともに「民友社版」と同じ形式に戻されている。
- (16) 榎本隆司「『続俳諧師』」(昭和六十二年八月『解釈と鑑賞』)
- (17) 前掲注14参照。
- (18) 高浜虚子「俳諧一口噺 写生文と小説」(明治三十九年十月二十三日付『国民新聞』)
- (19) 正岡子規「叙事文」(明治三十三年一月二十九日付『日本』付録週報)
- (20) 高浜虚子「写生文の由来とその意義」(明治四十年三月『文章世界』)
- (21) 「作者の心的状態」という表現で作者の態度を論じた、夏目漱石「写生文」(明治四十年一月二十日付『読売新聞』)の影響が看取れる。
- (22) 高浜虚子「続俳諧一口噺 主観的写生文」(明治四十年八月三十日付『国民新聞』)
- (23) 高浜虚子「『俳諧師』に就て」(明治四十一年九月『早稲田文学』)
- (24) 高浜虚子「写生文界の転化」(明治四十一年十二月『文章世界』)
- (25) 虚子と自然主義文学との関わりについて、拙稿「漱石の写生文と同時代——虚子と自然主義、その様相——」(平成十一年十二月『近代文学試論』第三十七号)ですでに論じている。
- (26) 藤井淑禎「虚子小説における同時代的課題——「欠び」を例として」(平成三年十月『国文学』)、『小説の考古学へ——心理学・映画から見た小説技法史』(平成十三年二月 名古屋大学出版会)所収)
- (27) 日比嘉高「蒲団」の説まれ方、あるいは自己表象テクスト誕生期のメディア史」(平成九年三月『文学研究論集』14号)、『自己表象』

の文学史——自分を書く小説の登場——』(平成十四年五月 翰林書房)所収)

- (28) 高浜虚子「『俳諧師』序」(大正五年十一月 博愛館)
- (29) 高浜虚子「高濱虚子全集 第四卷」序」(昭和九年五月 改造社)
- (30) 「選歴座談会(六)」(昭和九年七月『ホトトギス』)
- (31) 高浜虚子「改造社版文庫本『俳諧師・続俳諧師』「跋」」(昭和十四年六月 改造社)
- (32) 高浜虚子「俳句の五十年」(昭和十七年十二月 中央公論社)中の「事実を偽らずに」及び「今日の写生文」
- (33) 前掲注2参照。
- (34) 前掲注25参照。
- (35) 例えば、原子朗氏「写生・写生文——日本近代文学史の問題として」(平成三年十月『国文学』)は、「写生文は最初から小説の文章ではない、少なくとも小説には適さない」、「美趣、詩味をそなえて自立する文章、それが写生文なのである。」という。このような指摘も加味していかなければなるまい。

附記

「俳諧師」「続俳諧師」の引用は、それぞれ九十回本、百回本を定本とする『定本高浜虚子全集』(昭和四十八年十一月〜五十年十一月 毎日新聞社)をメインとし、『国民新聞』初出、『明治大正文学全集 21』(昭和三年七月 春陽堂)、『現代日本文学全集 40』(昭和五年五月 改造社)も使用した。虚子の写生文論については一部「ホトトギス」も参照し、漱石については『漱石全集』(平成版第2次刊行 平成十四年四月〜十六年九月 岩波書店)を使用した。なお、本稿は、二〇〇五年度日本近代文学会九州支部春季大会での発表を基にしている。

(やました こうせい、近畿大学附属福山高等学校・中学校)